

トピックス

稲こうじ病の生態と防除のポイント

稲こうじ病は発生量が多くなると品質低下や減収に結びつく病害で、兵庫県では2014年に採種圃^ほで多発し、問題となった。本病は穂に形成した厚壁胞子が土壤に残存し翌年の伝染源になる土壤病害である。薬剤防除は出穂21～14日前頃が最適で、それより早くても遅くても効果が劣る。

病原菌と被害

稲こうじ病は、収穫期のイネ^{もみ}に暗緑色の厚壁胞子の小塊である病粒が形成される病害で、病原菌はバツカクキン科の *Villosiclava virens* である(写真)。

本病は世界各国の稲作地帯で発生が報告されており、病粒にはかび毒の一種であるウスチロキシンが含まれる。収穫調整後の玄米に病粒が混入すると規格外となることから経済的な被害が大きい病害である。

発生生態

出穂後の登熟期に穂の^{もみ}に形成された暗緑色の病粒に含まれる厚壁胞子の約半数が収穫する時に土壤表面に落下し、伝染源となる。

そのため、多発した履歴がある圃場は好適な条件がそろると、再発しやすい。

発病圃場で翌年、イネを栽培すると、土壤中で厚壁胞子が発芽してイネの根の細胞間隙から侵入

すると考えられている。侵入菌糸はイネの生長点を経由して、止葉の葉鞘^{しやう}内で幼穂^{えい}の穎花先端から花器全体を取り巻いて病粒を形成する。穂ばらみ期の降雨日数が多いと発生する。多肥は発生を助長し、飼料用稲や晩生の水稻は発生しやすい傾向がある。

防除

転炉スラグ等、土壤改良資材の施用や夏期の大豆等への転作が被害軽減に有効である。化学的防除法として、銅剤又はシメコナゾール剤の防除効果が高い。防除の適期は両剤とも穂ばらみ期頃であるが、防除適期が狭く、タイミングが重要で、適期を外すと防除効果が劣る。防除適期の目安は表のとおりである。

今後の方針

土壤改良資材など薬剤以外の被害軽減技術と薬剤の併用を検討し、総合的な防除対策の確立を目指す。

内橋 嘉一 (病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)



写真 稲こうじ病の病徴

表 稲こうじ病防除に効果がある薬剤と散布期間の一般例

剤名	成分名	散布期間
ドイツボルドーA	塩基性塩化銅	出穂期21～10日前
Zボルドー粉剤DL	塩基性塩化銅	出穂期21～10日前
モンガリット粒剤	シメコナゾール	出穂期21～14日前
モンガリット1キロ粒剤	シメコナゾール	出穂期21～14日前